黄昏

私の小学校の頃の夏休みは、毎朝、腕白大将の命令で日の浦の広場での早起き会に出かけたものだ。まだ家族が起き出てこないうちに、ひとり床を離れ台所の横を通ると、母が早くも飯を炊き上げ、おひつに移しているところである。母は私を見ると、その釜の底のおこげのところを、塩で結んで小皿に乗せ、黙って私の前へ差し出す。それは握るのがさぞや熱かろうと想像がつくほどで、私はフーフー言いながらそれを食べ終え、夏の朝のひんやりと快い道を広場へ向って走るのが、この時期の楽しい日課だった。

島に住む人々は実直な人が多いが、それは自然からものを学ぶという体験を子供の頃から身につけているからだろう。最近、学校に行き来する子供の姿は見られても、野山や海辺で遊ぶ姿も、野良で親の手伝いをする姿も見ることは少ない。これは都会の生活も農村の生活もその差は少なくなったかわり、現在の社会で起こっているさまざまな問題が、決して都会だけに集中する質のものではなく、農漁村にも起り得

るものだということを示していると思われる。

一度ゆっくり訪ねてみたいと思っていた淡路島で知人の結婚式があり妻と出かけた。街は強い潮の匂いに包まれていた。高層の建物が少ないので空は広いし、明らかに戦前の建物と思われるものが並んでいた。普段、私は街中で知らない人に話しかけたりすることはない。それが淡路島では何人かの人に話しかけた。どこかノンビリしたところがまだあり嬉しかった。

結婚式って何でこんなに金がかかるんだろう。子供を何人も持っている親は、まるで子供たちの結婚式のために働いているようなもんだと同情した。プロ化した司会者のおしゃべり。ショーのような新郎新婦の入場。でかいウェディング・ケーキへの入刀。お色直し。打ちかけ姿からウェディング・ドレスへ。新婚旅行用の服へ。お色直しのたびの拍手の強要。キャンドル・サービス。両親への花束贈呈。これらのことが、なお今日も「盛大」に続いているのをみると、世間の大方の人々は、やむを得ない儀式だとあきらめているのだろうか。わずか四十年前、彼ら両親が結婚したころは、こんな風習はなかった。昔の結婚式を知っている筈の観たちが、なぜ息子や娘のために、あんな虚式をやるのだろうか。自分らに果たせなかった「華やかな結婚式」をやってみたいのだろうか。

戦前の日本の貧しさ戦争中と戦後の食糧難と飢餓、住宅難、生活の窮乏を知っている私らの世代にとって、現在の生活は比較にならぬほど便利で快適になっている。たいていの家には、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、ステレオ、掃除機、カメラ、電気炊飯器、さらにクーラーや各種暖房具、ピアノまでそろっている。昔、といってもほんの四十年前、私の妻などはタライに向かってごしごし洗濯をやっていた。

私はとき折り交友関係のパーティに出掛けることがある。うまいものを選び、珍しい料理を食うため、会場をうろうろする私がこんなことを書くのはちょっと気が引けるが、豪華なホテルの中のテーブルに料理の山が食い散らかされたまま残されているのを見ると、昔の人の言うとおり、これではいつかバチが当たるのではないかという気になる。

たくあんにたらす一滴二滴の醤油がぜいたくだったころ、島の老人が、「なんとか竹の子のとれる時期に死にたかあ、そうすりゃあ—精進料理も作りやすかけんなあ、残ったうちのもんも助かるたい。もうお医者さんにかかっても無駄じゃけん、呼ばんごと言うとばって、息子が言うことときかじい呼ぶとばい。気持は嬉かばって、お金のもったいなかあ」と涙声で話した言葉が、今でも私の耳に残っている。

式場で謡曲の「結婚式」というのをうたわれた。中に「夫婦はこれ宿縁」という一節があるが、ほんとうにいい言葉だと思う。人の縁とは不思議なものだとつくづく思う。

健康な妻が四十度を超す熱を出して寝込んだ。今までになかったことである。高熱で譫言を言う妻が可哀想であった。妻は運悪く私のところに嫁したのではなく、私の考え方がちょっと変っているところ(いまは普通)と貧乏で強情っぱりなところ(いまは気が弱い)。つまりこういう男は自分でなくちゃ面倒を見る女性はいないだろう、と憐れんで来てくれたのである。私が妻から学んだものは物を大切にするよりも人を大切にする気持であった。われわれの生活はほんのわずかのことで変調を来たすものである。それだけに何事もなくて一日が過ごせるのは、すばらしいことだと感謝しなくてはならないと思う。

いずれは私たちのどちらかが病むであろう。そしてこの世を去るであろう。そして一人だけが残される。

老いの辛さは誰にもいずれはやって来るのだ。秋にものの哀れを感じた昔の人たちの心の繊細さを、この年になってつくづく思う。

私たちが結婚した当初は、八畳一間の貸間だった。そのガランとした部屋にあったものは、ふとんや鍋釜をのぞけば、タンス一つぐらいだった。四十年を超す私ら夫婦生活のなかで、あの頃くらい生きるということに懸命だったときはなかった。そういう何もない貧しい生活、この世に自分たち二人が寄り添って生きている事実を、毎日確認するようなものだった。

人は生まれつきいろんな特徴を持って生まれてくる。美しい子もいればそうでない子もいる。頭のいいのもいれば、運動神経のすばらしいのもいる。みないいところもあれば悪いところもある。デコボコしているのが人間であって、だからこそ人間は面白いと思う。

どんな職業にもそれ相応の悩み、喜び、いやなこと、嬉しいこと、トラブル、友だちつきあいの楽しさ、つらさ、誇りとかある。誰でもそれを言う。自分の職業に満足している人は少ない。たいていの人は「食っていくため」と言っている。いやな仕事でも収入を得るために我慢し、家族のためというぐあいに生きている人は多い。

物が豊かになり、衣食住のスタイルが昔にくらべ大きく変化している現代社会においては、考え方や人の生き方も変化している。かつての社会には「断ちもの」という習わしがあった。神にある願いごとをするために何かを断つ。塩断ち、茶断ち、酒断ちなどをする。断つことが自分にとって苦痛なものを、ある一定の期間断つわけだ。私はこれは捨て難い習わしだという思いが強い。子供の頃の大病、復員後わかっ

た出征中の母の断ちものは、父が心配のあまり止めるほどであったという。母のとった行動の数々は、愛の深さは、痛いほど私の心をゆさぶった。

新聞で、知名士の死亡欄を見るとき、いつの頃からか、その年齢に目が行くようになった。私と縁のない知名士の死亡は、ニュースとしての関心の方が強いが、自分の友人知人とか、島のほぼ年齢の近い人などの訃報に接するとやはり何とも言えない感慨に浸らざるを得ない。その何とも言えない、胸をしめつけられるような感慨は、年をとるにつれて深まって行くようである。

高齢化時代とはよくぞ言ったもので、近年は街を歩いても、乗りものに乗ってもずい分と老人が目立つようになってきた。私も勿論その一人であるがあまりにも老人の多い場面に行き合うと、どのような生き方をされているのかと、ふと考える。

福岡へ行く電車に乗っていて、自分より年上の人のいないのに気が付きせめて、後九年しか残っていない二十世紀を、せいぜい大事にしたいものだと思ったりする。どうせ縁もゆかりもありそうにもない二十一世紀には目もくれないで、黄昏の二十世紀の、足元をしっかり見つめて、てくてく歩いて行こうと思っている。

ある程度心身の老化が進むと、体力的に若い人と行動ができにくくなると同時に、精神的にも若い世代の情緒について行けなくなるようである。死というものは、このようにして、まず身体、次に精神の順で、次第に社会や家族から距離を置くようになり、ついに完全に姿を消す、という状態をいうのではないか、と近ごろ思うようになってきた。

かつてはどんな席に出ても自分がいちばん若かったのに、いつのまにかいちばん年かさになっている。人は年をとったからといって決して利口になるわけではない。もし利口になるならこの高齢化社会は利口者だらけになっているはずなのに、そうは思えない。

戦争によって、死んだ人、親や子供を亡くした人、家を焼かれた人、財産を失った人、多くの不幸が発生した。こうした災害とは別に、食糧、衣料の欠乏という日常生活の苦しさもあった。豊かな時代に育った人たちは戦争の悲惨さは歴史で知ることができても、日常生活がどれほど困難であったかは、想像することはむつかしいと思う。戦争の苦しさを知らない人が多数になった時、又戦争が起きはしないかと気になる。

私の人生も残りは少ない。今の平和と繁栄が逆転するという波瀾はもうないように願っている。

別れはつらいものである。私には二人の兄と一人の姉がいるが、どうも私が最後の生き残りになるような気がしてならない。その時は、独りで泣きながら、兄姉の供養を心を込めてやってやりたいと、真剣に考えている。可愛がられて育った末っ子の、せめてものおくりものだと思っている。

秋になって、木の葉が枝から落ちるように、或る日、ごとりとこの世を去りたいものである。できれば世話になった妻にサヨナラが言えれば、この上もない。